

土土器はⅢ期、SD04出土土器はⅣ期とすることができる。ただし、Ⅱ期とした礫上土器群中のPo-13は遺構の章でも述べた様に、出土状態はⅢ期のものと俊別し難い。従ってPo-13に含まれる綾杉文タタキの甕も、Ⅲ期に下る可能性は十分にある。

**各遺構の時期** 今回検出した弥生時代後期の遺構には、竪穴住居址、掘立柱建物址、壺棺墓、溝、土坑等があるが、その大半は上記分類のⅣ期を中心とする時期と考えている。この内、銅鏃出土のSD02は庄内期に下るものであり、柱穴内から波状文で飾る二重口縁壺片を出土したSB01、庄内期にも類例（姫路市播磨長越遺跡土坑1<sup>(註83)</sup>、八尾市久宝寺南遺跡Ⅰトレンチ第4遺構面C-SD46<sup>(註84)</sup>、亀岡市北金岐遺跡SB03等<sup>(註85)</sup>は、口縁部形状が異なるが、これに属するものと思われる）が求められる高坏を出土したSB07も庄内期に属す可能性を持っている。ただ後2者に関しては、当地の土器編年の充実をまって結論を下したい。

### 第3節 弥生時代後期の甕の煮沸形態

嘗て森本六爾氏は、弥生土器の地域的様式研究を進める中で、畿内から関東に所在する遺跡で出土する土器類に、それぞれ煮沸と貯蔵の2形態が認められることに注意された<sup>(註86)</sup>。その後、弥生土器の地域的、時間的様式研究は着実に進められて来たが、煮沸・貯蔵の2形態から当時の生活の発達段階を具体的に追究することは少なかった。ただ縄文土器の煮沸形態に関しては、縄文農耕論との関係で、深鉢形土器の煤付着状態と内面の炭化物の観察から、煮沸された内容物を推定することも試みられた。

**西川卓志氏の研究** 一方、弥生土器に関しては、1981年に発表された西川卓志氏の考察が<sup>(註87)</sup>、煮沸形態の具体的研究として最初のものと思われる。西川氏は河内地域の資料に拠りながら甕の煤化、赤色化、無変化部位を詳細に観察され、前期～後期を通じ、甕下半の一部を土中（炉中）に埋置する方式が存在したことを明らかにされた。

また後期に入ると、地面に土器を置いて煮沸するものと、地面から離して使用する例が前半以降増加し、特に後者は北鳥池遺跡下層式前後以降に煮沸形態の大勢を占める様になったとされた。

氏は、庄内甕の観察成果から甕底部の一部を土中又は灰中に埋置するものを弥生時代型、地面から離す方法を古墳時代型と呼んだ。

**川西宏幸氏の研究** 川西宏幸氏は、煮沸用土器を器形・技法・使用法に焦点をあて、調理面から人間生活の歩みを明らかにしようとされた<sup>(註88)</sup>。そして、前期・中期の煮沸用甕形土器には、下腹部に赤・黄色の加熱痕が見られるのに対し、大阪府船橋遺

跡、奈良県布留遺跡出土の後期のものには、底面全体に赤・黄変した例が多いことに注意され、これを煮沸時に底面が強熱される状況を示すものと考えられた。

その具体的方法については、V様式期に確実に溯る土製支脚が認められないことから、これ以外の何らかの方法によるものとされている。

**藤田至希子氏の研究** 藤田至希子氏は、奈良県矢部遺跡の布留式最古段階の資料を検討され<sup>(註89)</sup>、煤付着部位が外表面全体や、頸部を除く外面全体にあるもの、また下半の煤が上半に及ぶものを炉型煤類型、体部下半を中心に、口縁部にも付着するものを含めて、カマド型煤類型と呼称された。

**柳瀬昭彦氏の研究** 柳瀬昭彦氏は、岡山県百間川原尾島遺跡井戸16と同上東遺跡オの町地区P-1の資料を検討され<sup>(註90)</sup>、煤の付着状態から、表面全体に比較的濃く付着するAタイプ（底部近くの煤が消えるものをA'とする）と、上半部は薄いか無く、下半に濃く付着するBタイプ（底部近くの煤が消えるものをB'とする）に分類され、前者を炉型、後者をカマド型とされた。

そして、百間川遺跡では、後期中頃までカマド型は見られず、古墳時代前期（下田所期、亀川上層期）でもわずかに散見されるのみであるとされた。

**出土甕の検討** 以上の成果を踏まえ、本遺跡の甕形土器を観察すると、外面の煤と内面の炭化物が付着する部位でいくつかのタイプに分類することができる。

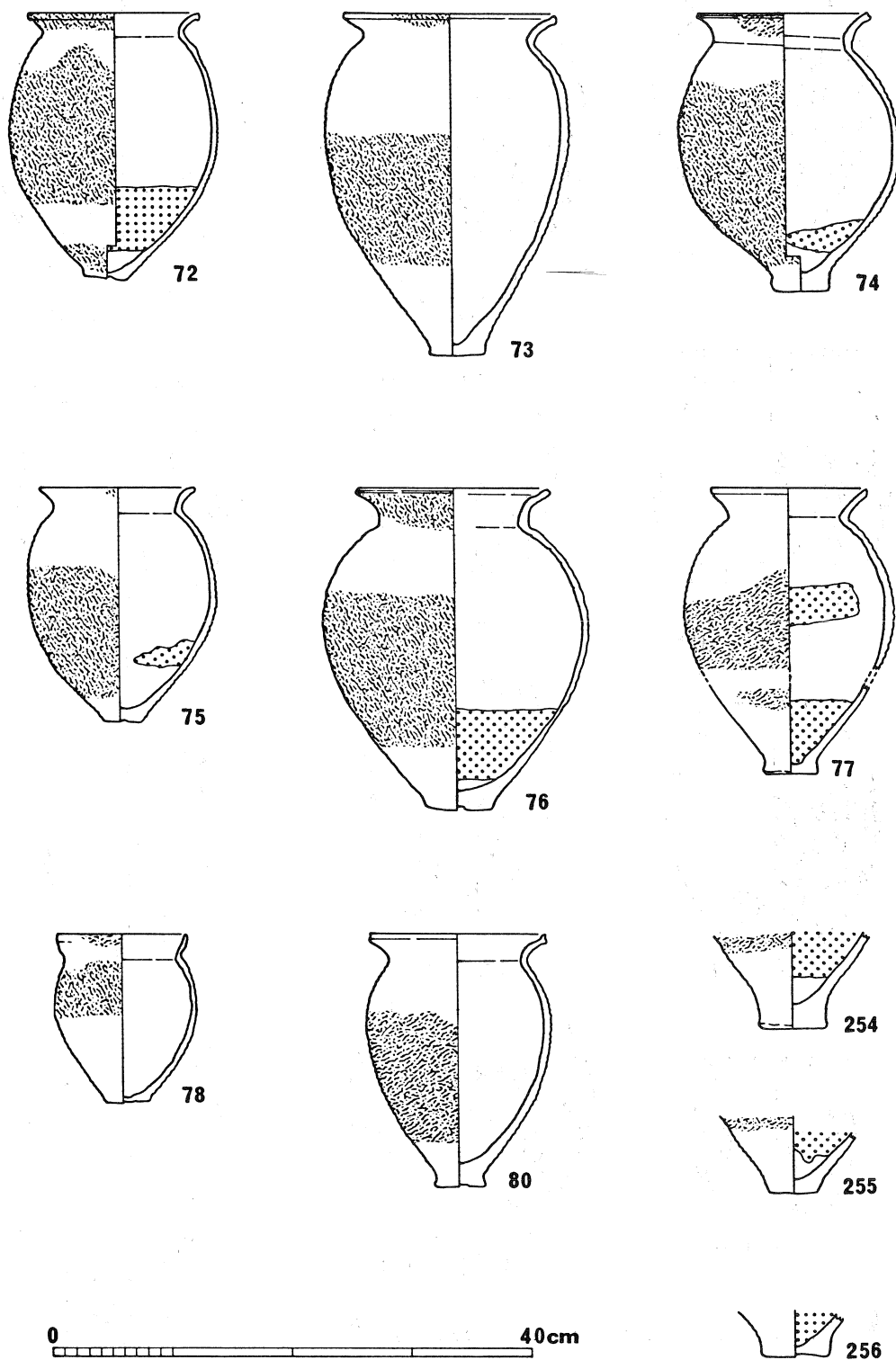
ここで観察の対象としたものは、完形品が多く、時期的変遷をとらえることのできたSB区土器群とSD04出土土器である。

**分類** A…内面の炭化物が底部内面に付着せず、底部からやや上に帯状に残る。外面の煤は、中位または中位～下半にかけて付着するものが多く、下半～底部外面と底部裏面には煤が付着しない。底部外面に煤が及ぶものもあるが、それは部分的でかつ薄い。（第66図－72・74～76・254・255、第67図－119～121・124・131、第68図－133・137・139、第69図－164・168・172）

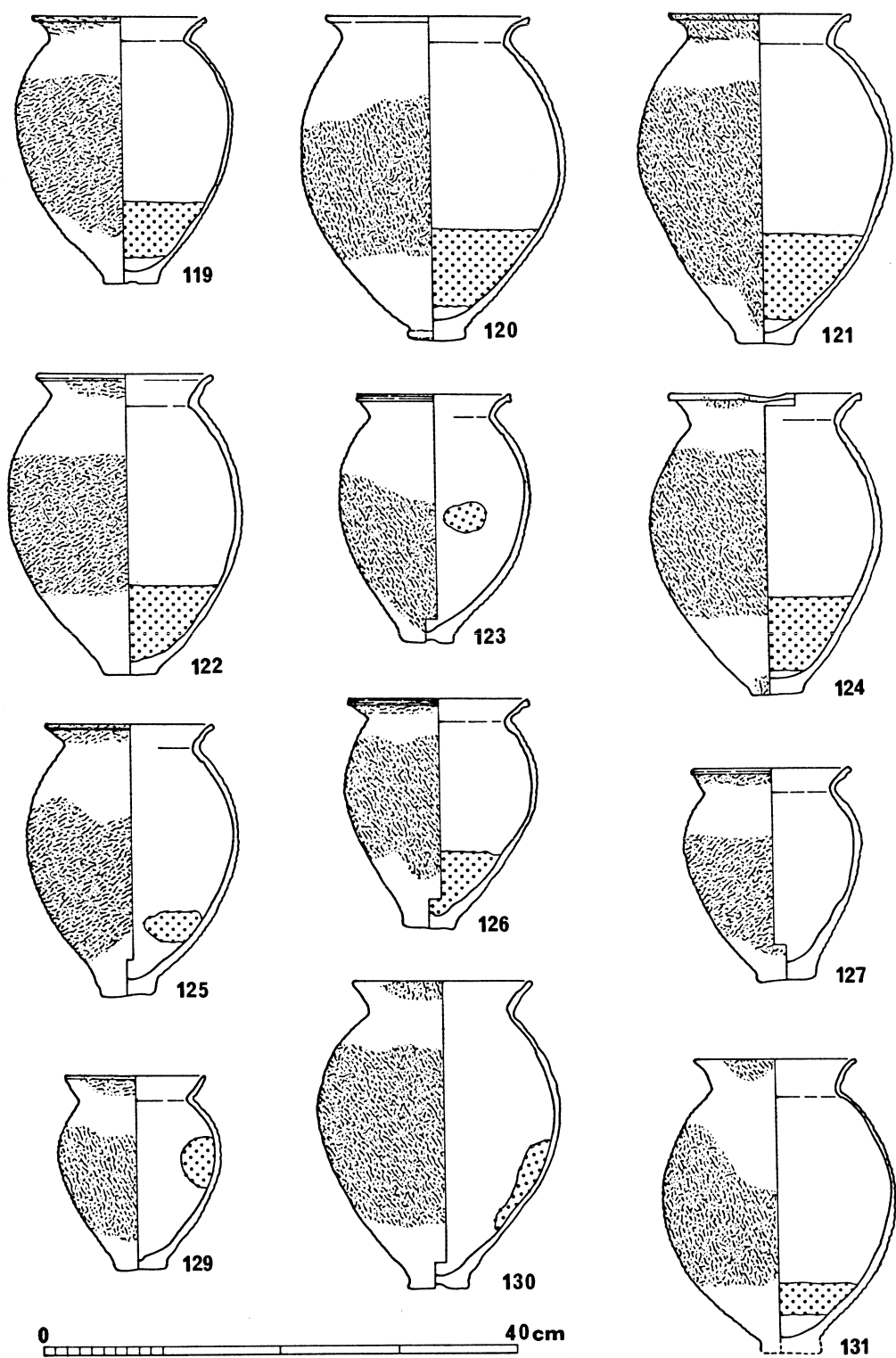
B…内面の炭化物が底部内面にも付着するもの。外面の煤付着状況はAと変わらない。（第66図－77・256、第67図－122・126、第68図－134・142・257、第69－167・169）

C…外面の煤が底部裏面にまで付着するもの。破片でしか確認できなかった。従って、上半の状況は不明である。内面の炭化物は、底部内面からやや上方に、部分的に残る。（第68図－259・260）

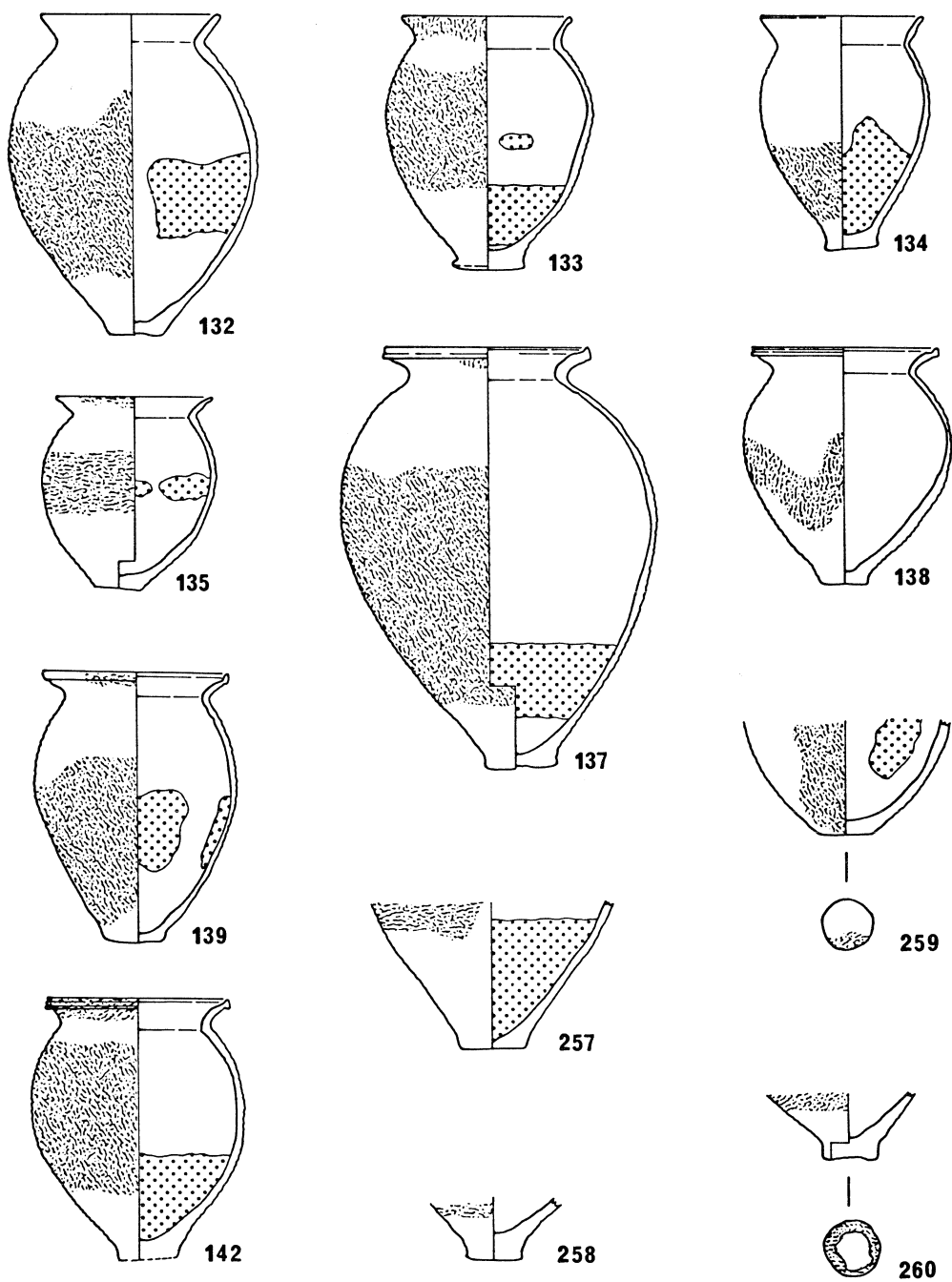
C'…底部裏面に煤は付着しないが、底部外面～裏面にかけて、器表が赤変し、荒れが見られるもの。（第67図－125・130、第68図－132・135・258、第69図－173・174）



第66図 煤・炭化物付着状態図 (1)

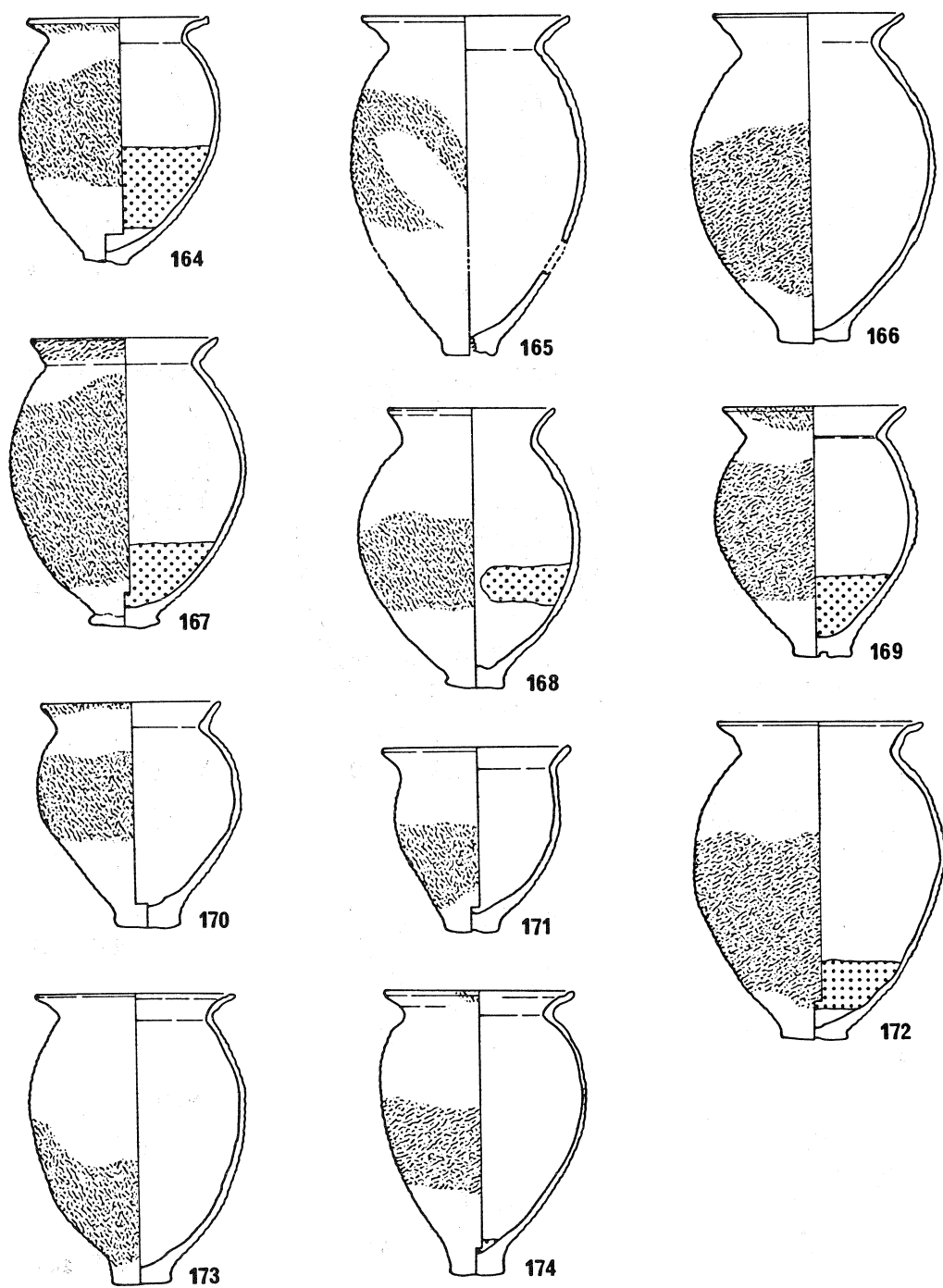


第67図 煤・炭化物付着状態図 (2)



0 40 cm

第68図 煤・炭化物付着状態図 (3)



0 40cm

第69図 煤・炭化物付着状態図（4）

## 煮沸形態

以上のA～C'までの類型から煮沸形態を推定してみよう。

Aは西川氏が中期の煮沸方法としたもので、炉中に底部の一部を埋めて安定を計り、使用する形態である。氏は主に煤と外面の無赤変部位で、これを想定したが、内面の炭化物付着状態からもこの考えが妥当性が高いものと思われる。大型甕（137）の内面炭化物が小型甕に比較し、より上方に残るのは、大型品であるが故により深く炉中に埋める必要があった事を示すものであろう。

Bは、底部を炉中に埋めない方式である。西川氏は底部裏面を除く、外面下半部に赤変化や器面の荒れが認められるとしたが、本遺跡出土例では、底部裏面から外面下半部にかけて暗黄色に変色するものが大半で、赤変しても一部に留まり、器面も荒れは殆んど見られない。この差異が何によるものか、今断定できないが、炎の強弱、持続時間等が影響するものであろう。

CはC'と共に炎が土器底部裏面に当たっていることを示すものと考えられる。柳瀬氏は藤田氏の分類基準の考えを受け、煤が外面下半に厚く付着し、上半にはないか、薄くしか着かないものをカマドを使用した結果とされた。が、当遺跡では底部裏面に赤色化があるもので外面の煤が下半に限定されるもの（173）もあるが、外面の中位～上半にかけ煤が残るものがあり、カマドの使用に関しては、疑問が残る。ただ当地でも川西氏が指摘されるように、カマドに代わるようなV様式期の土製支脚の例はなく、土器を地面から離して使用した具体的な方法は不明である。しかし1例のみであるが、第68図-260の底部裏面には、支脚使用によると思われる荒れた面を持つ凹部が認められる。

## 煮沸形態の 時期的変化

前節で設定した後期のⅡ期に属す、SB区礫上出土土器では底部片を含め、計8個体に対する分類が可能で、Aが6個体、Bが2個体ある。Ⅲ期のSB区シルト層では、9個体がA、5個体がBに分類でき、C・C'も計7個体見られる。Ⅳ期のSD04出土土器も資料は乏しいが、Aが3個体、Bが2個体、Cが2個体ある。

A～Cの比率を出す程の資料数には恵まれないが、注意されるのは、Ⅲ期段階でのC型の出現であろう。土器底面を地面から離し、炎を主として底部裏面で受けるC型の煮沸形態が、古墳時代的であることは疑いなく、この点でⅢ期はより評価されるものと思われる。

今後の課題としては、西川、藤田、柳瀬の各氏が正しく指摘されたように、1集落の、1時期に於ける各煮沸形態の混在の原因と、地域間での各煮沸形態の採用の遅速の有無等があげられよう。

## 注

- 注1 官幣中社長田神社社務所・長田神社御造営奉賛会『官幣中社長田神社復旧御造営史』 1929年
- 注2 神戸市立考古館『おおむかしの神戸』 1976年
- 注3 片岡肇「近畿地方における押型文土器文化について」『平安博物館紀要』第五輯 財団法人古代学協会 1974年
- 注4 神戸市教育委員会「宇治川南遺跡」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』 1986年  
丹治康明「六甲山南麓における縄紋時代の動向」『神戸の歴史』第13号 神戸市市長総局 1985年
- 注5 直良信夫「神戸市名倉町出土の縄文土器片」『近畿古代文化叢考』葦牙書房 1943年
- 注6 神戸市教育委員会「楠・荒田町遺跡」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』 1989年
- 注7 丸山潔・丹治康明『楠・荒田町遺跡発掘調査報告』 神戸市教育委員会 1980年
- 注8 神戸市教育委員会『大開遺跡現地説明会資料』 1988年
- 注9 山本雅和『戎町遺跡』 神戸市教育委員会 1989年
- 注10 千種浩『松野遺跡発掘調査概報』 神戸市教育委員会 1983年
- 注11 注8に同じ
- 注12 神戸市教育委員会「三川口町遺跡」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』 1988年
- 注13 注7に同じ  
神戸市教育委員会「楠・荒田町遺跡」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』 1988年
- 注14 注4に同じ
- 注15 小林行雄「神戸市東山遺跡弥生式土器研究」『考古学』第4巻第4号 東京考古学会 1933年
- 注16 浜田耕作「貝輪を容れた素焼壺」『人類学雑誌』第36巻第8号 東京人類学会 1921年
- 注17 注15に同じ
- 注18 注6に同じ
- 注19 兵庫県教育委員会『神戸市鷹取町遺跡現地説明会資料』 1987年
- 注20 梅原末治「神戸市板宿得能山古墳の調査」『歴史と地理』第14巻第4号 史学地理学同好会 1924年



- 森本六爾「得能山古墳」『考古学雑誌』第14巻第3号 考古学会 1924年  
梅原末治「神戸市板宿得能山」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第二輯 兵庫県 1925年
- 注21 辰馬悦蔵他「会下山二本松古墳及び経塚」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第五輯 兵庫県 1928年  
北野耕平「摂津会下山二本松古墳における内部構造の考察」『兵庫史学』第65号 兵庫史学会 1974年  
神戸市教育委員会「会下山二本松古墳」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』 1988年
- 注22 梅原末治「神戸市丸山古墳と発見の遺物」『考古学雑誌』第14巻第5号 考古学会 1923年  
同「神戸市夢野丸山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第二輯 兵庫県 1925年
- 注23 太田陸郎「有鰭埴輪円筒」『考古学』第2巻第4号 東京考古学会 1931年  
喜谷美宣「市街地に消えた大前方後円墳」『雪』第30巻第9号 神戸市防火協会連絡協議会 1978年
- 注24 妙見山麓遺跡調査会の山仲進氏から資料提供を受けた。記して感謝いたします。
- 注25 森田稔「長田区観音山古墳の出土遺物」『博物館だより』No.23 神戸市立博物館 1988年
- 注26 本村豪章「古墳時代の基礎研究稿」『東京国立博物館紀要』第16号 東京国立博物館 1981年
- 注27 神戸古代史研究会「兵庫県下の石棺」『神戸古代史』第2巻第1号 1975年
- 注28 梅原末治「神戸中宮古墳と其の遺物」『古墳址記』 1926年  
小林行雄「技術からみた古墳の様式」『考古学』第5巻第6号 東京考古学会 1934年
- 注29 注10に同じ
- 注30 神戸市教育委員会「神楽遺跡」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』 1987年
- 注31 注19に同じ
- 注32 注6に同じ
- 注33 神戸市教育委員会「湊川遺跡」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』 1989年

- 注34 稲沢正弘・渡辺伸行「神戸市長田区林山窯について」『神戸古代史』第3巻第1号 神戸古代史研究会 1986年
- 注35 島田清「房王寺出土の古瓦に就て」『神戸史談会会報』昭和12年7月 神戸史談会 1937年  
高井悌三郎「六甲山南麓の奈良時代遺跡」『伊丹市史』第1巻 1971年
- 注36 神戸市教育委員会「神楽遺跡―第4次―」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』 1989年
- 注37 注21に同じ
- 注38 菅本宏明『神楽遺跡発掘調査報告書』 神戸市教育委員会 1981年
- 注39 神戸大学により調査された。
- 注40 宇野隆夫「井戸考」『史林』第65巻第5号 史学研究会 1982年
- 注41 容量の測定は、都出比呂志氏の方法による。土器実測図を利用し、土器を直径の異なる厚さ1cmの円板の集積と見做して測定した。  
都出比呂志「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考』 小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会 1982年
- 注42 24は布留式併行期に下る可能性もある。
- 注43 京都府亀岡市北金岐遺跡B地点SD01出土土器に類例がある。  
石井清司他『北金岐遺跡』 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985年
- 注44 兵庫県三原郡西淡町の志知川沖田南遺跡に類例がある。  
松下勝・別府洋二『淡路・志知川沖田南遺跡』 兵庫県教育委員会 1987年
- 注45 小林行雄・佐原眞『紫雲出』 託間町文化財保護委員会 1964年
- 注46 菅原康夫『黒谷川郡頭遺跡』II 徳島県教育委員会 1987年
- 注47 中期の高杯杯部と考えられる。  
福井英治『田能遺跡発掘調査報告書』 尼崎市教育委員会 1982年
- 注48 丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会 1985年  
森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開―神出古窯址群を中心に―」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館 1986年  
平良泰久・伊野近富「平安京左京跡（内膳町）昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1980―3）』 京都府教育委員会 1980年
- 注49 この節は当教育委員会の丹治康明氏の御教示によるところが大きい。

- 注50 注4と同じ
- 注51 岡崎正雄「縄文時代の土器」『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 1985年
- 注52 今宿丁田遺跡発掘調査団「姫路市今宿丁田遺跡出土遺物について」『第9回埋蔵文化財研究会資料』1981年
- 注53 浅岡俊夫「伊丹市口酒井遺跡の凸帯文土器」『歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念事業会 1988年
- 注54 家根祥多「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所 1984年
- 注55 南博史「縄文晩期刻目凸帯文土器について」『伊丹市口酒井遺跡―第11次発掘調査報告書』伊丹市教育委員会・財団法人古代学協会 1988年
- 注56 北野俊明・野田芳正「鈴の宮」III『堺市埋蔵文化財調査報告』第11集 堺市教育委員会 1983年  
北野俊明「大阪湾沿岸の縄文晩期刻目凸帯文土器に関する一考察」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学資料室 1985年
- 注57 北野俊明「浜寺船尾西遺跡発掘調査報告」『堺市埋蔵文化財調査報告』第21集 堺市教育委員会 1985年
- 注58 泉武『前栽遺跡―縄文時代晩期遺跡の調査』天理市教育委員会 1984年
- 注59 この傾向は口丹波地方の亀岡市北金岐遺跡でも認められるが、同じ時期に属す宇治市寺界道S K02の胎土Bは0で地域的差異も激しい。田代弘「縄文土器」『北金岐遺跡』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985年  
南博史「縄文時代晩期の遺物」『寺界道遺跡発掘調査概要』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第10集 宇治市教育委員会 1987年
- 注60 注55に同じ
- 注61 家根祥多「縄文土器」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』II 財団法人大阪市文化財協会 1982年
- 注62 森岡秀人「西摂地域における畿内第V様式編年試案」『新修芦屋市史』資料篇 1976年
- 注63 注41都出氏の論文
- 注64 神戸市東灘区の郡家遺跡（城の前地区第24次）の弥生時代後期集石墓出土土器はS D04とほぼ同期と考えられるが、木の葉底の占める比率は低いという。調査担当の丸山潔氏から御教示を得た。

- 注65 この地点は西ノ辻遺跡に含まれる。  
芋本隆裕「鬼塚遺跡」II『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報』19  
東大阪市遺跡保護調査会 1979年
- 注66 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡I地点の土器」・「大阪府  
枚岡市額田町西ノ辻遺跡E・F・D・H地点の土器」『弥生式土器  
集成』資料篇I 日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員  
会 1958年
- 注67 芋本隆裕「鬼塚遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報』I 東大阪  
市遺跡保護調査会 1975年
- 注68 中西靖人・国乗和雄・宮崎泰史・西村尋文・岸本道昭『亀井遺跡』  
II 財団法人大阪文化財センター 1984年
- 注69 赤木克視他『城山』(その2) 財団法人大阪文化財センター 1986  
年
- 注70 永島暉臣愼・中尾芳治『長原遺跡発掘調査報告』(改訂版) 財団法  
人大阪市文化財協会 1982年
- 注71 藤田三郎「昭和59年度唐古・鍵遺跡第20次発掘調査概報」『田原本  
町埋蔵文化財調査概要』3 田原本町教育委員会 1986年
- 注72 木下正史「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」III『奈良国立文化財研究所  
学報』37 奈良国立文化財研究所 1980年
- 注73 土井孝之『船岡山遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会  
1986年  
同氏「紀伊地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編I 寺沢薫・森  
岡秀人編著 木耳社 1989年
- 注74 注47に同じ
- 注75 原口正三・森田克行『安満遺跡発掘調査報告書ー9地区の調査ー』  
高槻市教育委員会 1977年
- 注76 注65に同じ
- 注77 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』京  
都帝国大学文学部考古学研究報告16 1943年
- 注78 勝田邦夫「上六万寺遺跡の調査」『馬場川遺跡・上六万寺遺跡・山  
畑66号墳調査報告』東大阪市教育委員会 1981年
- 注79 森毅・南秀雄「和田マンション(仮称)建築工事に伴う加美遺跡発  
掘(KM85-6)略報」『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発  
掘調査報告書』大阪府教育委員会・財団法人大阪市文化財協会  
1987年

- 注80 渡辺昌宏・井藤暁子他『美園』財団法人大阪文化財センター  
1985年
- 注81 木下亘・須藤聖子『服部遺跡発掘調査報告書』豊中市教育委員会・服部遺跡発掘調査団 1986年
- 注82 泉武『東安堵遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1983年
- 注83 松下勝他『播磨・長越遺跡』兵庫県教育委員会 1978年
- 注84 赤木克視・一瀬和夫他『久宝寺南』（その2）財団法人大阪文化財センター 1987年
- 注85 注42に同じ
- 注86 森本六爾「弥生式土器に於ける二者一様式要素単位決定の問題」『考古学』第5巻第1号 東京考古学会 1934年
- 注87 西川卓志「弥生時代甕形土器の外表面観察－東大阪市域出土資料を中心に－」『調査会ニュース』18 東大阪市遺跡保護調査会 1981年  
同氏「弥生時代の煮沸形態とその変遷」『考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室 1983年
- 注88 川西宏幸「形容詞を持たぬ土器」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会 1982年
- 注89 藤田至希子「古墳時代前期の煮沸形態について」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1986年
- 注90 柳瀬昭彦「米の調理法と食べ方」『弥生文化の研究』2 生業 雄山閣 1988年